

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認証第第六二七号
平成二十八年九月二日発行(第百十九卷第九号)

ホトトギス

九月号



俳句随想〔四百十一〕

汀子

新聞の俳壇欄に次の俳句があった。

「新緑の万緑となる早さかな」「ん」と思わず気になった。新緑は五月の季題、万緑は中国の詩句から生れた見渡す限り緑のことで、歳時記には目と書かれてあつて五、六、七月の三カ月に渡る緑のことで、この中には新緑も含まれる。歳時記の改訂版を編むときの事が思い出される。侃々諤々、季題について論じ合った。六年掛かつて出来上がった改訂版である。新緑が万緑になるという表現はなく、一句の中に同じ種類の季題が入っていることになる。「……色の深まる早さ……」とすればいいが、それでは説明に終止してしまうであろう。我々は俳句は「季題を詠む詩である」と言つて研鑽してきた。季題を大切にしたいものである。また、私が朝日俳壇で中村草田男さんと一緒に選句会で草田男さんが言われたことが思い出される。「木の芽という季題はあつても、芽木という木は有りませんよ」と言われた。木の芽を芽木と表現した句が出てきたのである。俳句にとつて正しい季題の使い方しなければ名句は生まれまいであろう。また、俳句は短い詩である。一句の中に二つの季題を入れる時には、どちらかを季題と見ないで言葉として捉えた表現ならばいいと思う。新緑、万緑、どちらも同じ重さの季題であり、それぞれの解説をしつかり読んで使えば、このような一句は生まれなかつたであろう。目が入っている季題は同じ季節の三カ月に渡つているという印であることも知つて欲しい。

句日記 汀子

平成二十七年九月二日 ロイヤル俳壇

虫の音に包まれてゆく旅心
みちのくの旅も終りの虫時雨
快晴のみちのくの秋惜み来し
ひとしきり雨置いてゆく野分かな
九月五日 芦屋ホトギス会

爽やかに会へば親しくなつかしく
午後はもう快晴ならず秋の空
九月六日 下萌句会

露 深し 忌日の心抱くとき
萩にしとはつながりゆける萩芒
九月八日 大阪倶楽部

露 葎やうやく家居心あり
露 しぐれ裏徑通り来たる靴
台風の前報あなどる心なく
又かかる夜長の電話待ちしもの
秋の雨今日も気軽に掛け来し
九月八日 綿業倶楽部

こののちは月に心を置くことも
月満ちて行ける旅路のととのへり
一叢の芒は庭の一劃に
その話つづきありて月の旅
九月九日 祝「田鶴」五且五十号

重ねゆく日々爽やかに寿ぎぬ
九月十日 清交社

台風に残せし雨の止む気配
名風に今宵の心置き初むる
命日を告ぐる如くに鉦叩
コスモスに道間違へて風りしこと
分れては寄り添ふ風の秋桜
名月や満つれば欠くる心あり
九月十一日 工業倶楽部

花あるもなかりしものも秋の草

やうやくに葉月の心ととのへり
秋風の残せる雨をあねば足りぬ
秋風の過ぎし安堵にながら
九月十二日 伝統俳句協会全国俳句大会

雪を待つ斜面ただあり萩芒
どこまでも芒の視界又カーブ
天井の高きロビーや露涼し
何となく過ぐす一日爽やかに
秋出水ニュース怖れて聞くばかり
出句二句

スキー客来るはまだ先萩芒
九月十五日 有恒俳句会

快晴の野よ虫の音よ旅心
雁齋といはれてみればそれらしく
なほ旅の計画ありて月秋
講演の筋書まとめゆくも秋
九月十五日 無名会

月満ちてゆけば旅路の待つてをり
又もとの静けさありて秋の潮
満ちてあし欠けてあしとは月のこと
句日の月見ることもなく家居
屋の空渡る三日月となりけり
よく晴れて今宵の月となるべしと
九月十六日 夏潮句会

過ぎてゆく時間の早し秋の蝶
旅心沈めて秋の蝶を見る
雨降つて止んで日の差す草の花
メンパーに加はる若さ爽やかに
遠き旅近き旅ある若さ爽やかに
講演会近き露けき心かな
ふとよぎるものあり秋の蝶かとも
九月十八日 祝 笠寺六百号

重ねゆく秋晴の日々新しく
九月十九日 句会講演の会

居待月やうやく家居なりしこと

芦屋にも鯛を引きし浜辺あり
居待月間に歌舞伎見て秋の灯に
九月十九日 悼 脇教子様

秋灯に永遠の笑顔となられけり
九月二十四日 きざらぎ会

白露過ぎ忌日の過ぎてをりにけり
風いなしつつひるがへる稲の花
雨空を発ち秋晴に着陸す
露けしや旅から旅へ組む予定
九月二十四日 アネモネ句会

虫の夜ときぎてよりの詩心
考へるとき虫の音の外に時雨
考への行きつ戻りつ良夜かな
鮎鮎ありしこと秋灯の明るさに
九月二十五日 時雨会

吾亦紅忌日の東に加はりぬ
引きつづき信州の旅月いかに
台風の進路かかはりなき雨も
秋日傘雨に濡らして帰りけり
昔とは違ふ台風風かと思ふ
九月二十六日 北信越ホトギス俳句大会前日句会

霧深き 二千米 トキヘと山路
アルプスも富士も霧さへなかりせば
過去未来そよりて現在霧去来
露降りてそより光る山路かな
九月二十七日 北信越ホトギス俳句大会

待宵の月の所在は問はずとも
九月二十七日 北信越ホトギス同人会

秋草とていふはかばか散歩道
月見えぬ良夜の旅となりしこと
露けしや小諸に旅をせしことも
九月二十八日 アサヒカルチャー

後にせし小諸の今宵の月いかに
十六夜の家居叶ひし旅帰り
雲一つなき爽やかな朝帰り

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年九月一日 夢二忌全国俳句大会

雨も又花野忌を訪ふ一過客
夢二忌の野震災忌の絆

九月一日 カトリック新聞選者吟

新涼を纏ひてグレゴリオ才聖歌

九月三日 蕉心会

蚯蚓鳴く四日で六回の句会
大川に浸かりたさうな鱚雲

とんぼうの枝になり切る刹那かな
人類を弄びたる残暑かな

空の色剥いで塩辛蜻蛉かな
秋扇今日ええ仕事してまつせ

夜仕事といふ収録でありにつけ
地虫鳴く大川端は工事中

水を恋ひ水を恐れて蜻蛉飛ぶ

九月四日 六甲会

葉月潮底に眠れる陸奥長門
酌みて待つ更待月と君の笑み

更待の月の死角に猫二匹
初潮や鶴塚橋の袂まで

酒断ちてより更待の月遠し

九月五日 芦屋ホトギス会

撫子やタカラジェンヌのやうに揺れ
地虫鳴く首位を守りし阪神

秋天に飛び立ちさうなダイエット
爽やかに視力回復して句座へ

九月六日 野分会芦屋例会

瘦身を夜長の椅子に沈めけり
命日を近付けてある夜長かな

野の色を和らげてある吾亦紅

九月六日 青嵐会芦屋例会

竹の春塗り替へられし風の色
澄む水の続べゆく芦屋川の黙

年尾像視線の先の竹の春
新しき縁深めて竹の春

九月十日 土筆会

父逝きて三十五年白露又
唐黍を齧り歯科医でありにけり

秋霖に孤高の一羽佇めり

九月十二日 本伝統俳句協会全国俳句大会

出来秋を育んである越の風
秋灯下ヨヨー影を躍らせて

露の身を吐き出してゆくロープウェー

九月十四日 朝日カルチャー若草句会

真葛原地球の裏を見するかに
鱚雲豊の越後を見下して

葛の葉に色失ひし風となる

摩天楼串刺しにして鱚雲

九月十五日 北國文芸選者吟

越後より越中遥か稲の秋

九月十七日 登高会

唐辛メキシコ産といふ修羅場
唐辛救急車沙汰ありしこと

真鱚を手で捌きたる父偲ぶ

秋日傘二人並んで墓地を行く

瘦身の影すつぼりたる唐辛

九月十九日 ホトギス社句会

子規の墓参りて後のことなどを
指先の魔術師めきて鱚裂く

居待の月ワイン一本空に花

諷詠の心を色に子規忌供

九月二十日 青嵐会東京例会

子規忌句座終へ新たな句境かな

子規の墓素通りしたる秋彼岸
秋灯下ファックス訃報吐き出せり

九月二十日 野分会東京例会

吾亦紅には吾亦紅なりの訳
長き夜の祈りめきたる独り言

風だけや二小節しか弾けぬ曲
句心を夜長の椅子に沈めけり

九月二十日 若水句会

穴まどひ視線と悲鳴浴びて消ゆ
ねこじやらし古都の風情に活けられし

道幅を持って余したる穴まどひ

九月二十一日 田鶴五百五十号祝句

豊年を数多抜け来て誌齡祝ぐ
出来秋の四十五年十箇月

祝ぎ心感謝の心豊の秋

豊年の日出づる国といふ誇り

九月二十三日 目黒学園句会

西へ行く車窓を満たし竹の春
烏頭虚子山荘の盾として

かぐや姫降りて来さうな竹の春

九月二十六日 北國越ホトギス同人会 大会

秋冷や虚子の息吹を感じつつ
秋水の詩を紡ぎたる千曲川

走り蕎麦虚子も訪ひたる老舗かな

虚子句碑の一字一字に秋の声

虚子散歩道を露けき歩幅もて

九月三十日 百夜句会

冷やかに星に近づくと摩天楼
木犀の香を発ち君の香に着けり

長き夜の恋語るには狭き部屋
居待月待つとはなしに待てる犬

雑詠 廣太郎 選

戦場のごとくに地震や春深し 熊本 岩岡中正

囀に地震の神鎮まり給へ 同

余震なほ指先にある春の闇 同

夜桜や明日なき如く咲き誇り 龍ヶ崎 今橋眞理子

木星をとり囲みたる残花かな 同

旅終へて残花の日々の過ぎ易し 同

とめどなく胸にとどくや峰落花 長岡 安原 葉

落花貼りつきて山水濡らす道 同

また戻り来てこの庭の春惜む 同

句を作ることがくつろぎ桜餅 東京 大久保白村

桜餅日本に吉野ある限り 同

湯葉刺しは花の昼餉の一趣向 同

鰻 食 東 男 と 京 女 同 田丸千種

幼子も三社祭の男ぶり 同

チヨコレート三粒春愁治療薬 同

金髪のハイヒール脱ぎ花筵 渋川 山本素竹

花屑をつけて明るき靴の底 同

靴のまだ乱れてをらぬ花筵 同

天上へとどけとばかり吹雪く花 神戸 千原叡子

亀鳴くを聞かな吉野に泊つからは 同

行春の象へまはりて帰るべく 同

春愁は風雅のまことかも知れず 福山 竹下陶子

天帝とあそんでをりし雲雀かな 同

夜遊びの貝合せなどさるゝ雛 同

糸瓜苗子規の咳にて葉の尖り 神戸 涌羅由美

神輿 見る 特等 席の 肩車 同

路地裏の奥の奥まで祭かな 同

生来のいたづら好きに四月馬鹿 香川 湯川 雅

空 缺と きに 鳴らして 緑摘む 同

おぼろ 曳き ずりし 吉野の 朝日 差す 同

種袋 耳の 近くで 振つて みる 相模原 木村 享史

初花の 生れし 光放ち けり 同

鯉の 口霞を 吞んで 引つ 込みし 同

朝寝して 不思議な 夢を 出入りする 神戸 山田 佳乃

せせらぎは 銀の 鈴音 夏近し 同

呉服屋のおだて 上手や 暮遅し 同

初夏の 亀伸び 放題の 水面かな 東京 橋本 くに彦

ふんばつて 見せて 四股名は ひきが へる 同

糠床の 機嫌 診察 夏に入る 同

一望の 海風 ぎ懸 藤う ねる 奈良 古賀 しぐれ

沖へ 出で 五月の 風となる 白帆 同

風を 切り 海の 男の 更衣 同

雑詠句評（八月号より）

佳乃・純也・しげ人

霜衣・さい雪・くに彦

一步・雅・公次

仁義・廣太郎

地震続き蝸蚪に手が生え足が生え 八代 山下しげ人

四月の熊本の地震は本震あとも大きか余震が続き、いまま避難所で不自由な生活をしていちっしやる方も多し。熊本の八代にお住まいの作者の街も揺れ続けたのであろう。しかし蝸蚪はそんなことを知ってか知らずか手足が生え、命は着々と変体していつてゐる。作者の視点が、様々な事象を遠観していらっしやるような一句である。（佳乃）

平成二十八年四月に勃発した熊本地震で被災された作者である。これを書いている同年五月末になつても、未だ余震が続いているというかつて無いパターンの地震だと報道されているが、人間としてではなく、自然界全体の問題でもあるだろう。何か季節を通してそんな大きな力が感じられる。（廣太郎）

初蝶といふ一途なるものに会ふ 熊本 岩岡中正

春先、はじめて見る蝶は、いかにも新鮮である。その飛び方も、たしかに「一途」という感じがする。初蝶に出会つて、春が来たという実感をもつたことであろう。その気持が素直に表われている。（純也）

四季折々に季節として表現される「蝶」であるが、やはり本来の季節感としては春が代表的なものである。それが春になって初めて出会う蝶であれば尚更出会つた時の気持の昂りは一人であろう。そしてその蝶もこの世に生を享け、その喜びを一心に謳歌しているような表現が句として素敵である。（廣太郎）

〈以下略〉

天地有情

花子選

百本の薔薇より君の一行詩
 美しき刻過ぎやすく薔薇の雨
 オーバーを預け夜会に紛れゆく
 風呂吹を吹いて宇宙の話など
 花に会ふための言葉を胸に秘め
 花衣てふは心に着せるもの
 春宵や華美ならずともよき宴
 誌齡祝ぐ惜春の情持ち寄りて
 花冷の夜の集ひに心して
 花冷のまま東京の暮れてをり
 菖蒲湯の菖蒲の香り素肌なる
 まだ入れさうなる涅槃像の隅
 誰彼の面差し偲ぶ彼岸かな
 三椏の三つの定めを守り咲く
 戦ありて入学式もなきままに
 たよりなき大学生や入学期
 春風の大きく吹いてゐる御陵
 惜しむほど愛しくなりて春惜む

奈良 古賀しぐれ
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 長岡 安原 葉
 同
 相模原 木村享史
 同
 神戸 後藤立夫
 同
 吹田 大橋 暁
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 神戸 和田華凜
 同

さゆらぎもせぬ花の闇星零れ
 いづこよりふぶきくる花尾根の径
 朝湯より今日の桜を仰ぎみる
 水音に足音に花こぼれゆく
 風に日に水の音にも夏来る
 海亀の行き来の跡の波に消ゆ
 み吉野の花は七色十色かな
 句敵と枕を並べ花の宿
 春深き村には独り者多し
 春惜みつつ湯畑に立ちにけり
 蝶を追ふ首の坐りし赤児の目
 白は白黄は黄ともつれ蝶の昼
 寒の虹つきあげてゐる電波塔
 清らかなマスクに眼秀でし子
 一身を貫く地震や新樹冷
 地震の空整然として鳥帰る
 一番湯浴びて道後の朝桜
 鯛めしが名物にして花の宿

東京 河野美奇
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 東京 橋本くに彦
 同
 同 山田閨子
 同
 群馬 中杉隆世
 同
 東京 大久保白村
 同
 福山 竹下陶子
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 神戸 三村純也
 同

鐵門

稲畑汀子

「……高浜虚子により一〇〇年前に新作試演されたこの曲には、今日生きる私たちが心が刻まなければならぬ、大切なメッセージが込められています。多くの方にこの《鐵門》をご覧いただけますよう、皆様のご協力を伏してお願ひ申しあげます」という案内状が舞い込んだ。上演は四月五日の午後一時から、京都の観世能楽堂であるとのことであった。

是非見にきて欲しいと、三村純也さんを通して打診もあった。何とか時間を遣り繰りすることにして出席の返事を送った。

「どの様にして来られますか？」

その日が近づいて来るとお訊ねの電話がかかった。

「京都なら、車で参ります。南禅寺の近くなら、稲畑の家があったのでよく知っています。駐車場だけは確保しておいて下さい」

「承知致しました」

今年の桜は例年よりも早いようだとか刻々ニュースが入ってくる。《鐵門》の試演会の日、京都は丁度桜が見頃かも知れない。

ふと京都のお花見が心を過った。

「汀子先生、《鐵門》の日、京都はお花見の人出で車の渋滞が予想されます。電車で行らせて下さい。一応、駐車場は用意してあります」

というFAXが純也さんから舞い込んだ。

「大丈夫よ。時間をかけて気をつけて行くから」と一人言を呟いた。

四月五日の朝、車のガソリンを満タンにして点検もして貰った。

「鈴木さん、十時半に出掛けるから、お昼は、十時に用意して下さい」

「えっさつき、朝を召し上がったばかりですよ」

「いいの、いいの。時間をたっぷり見て行かないと、多分すごい渋滞だと思うのよ。ゆっくり時間を見て行かなくちゃーね」

「はい分かりました」

十時半に出られるように準備していると、インターフォンが鳴った。

「誰だろう。私はもう出掛けなければならないわ」

「日産の塚本さんです」

「あらー」

「もうすぐ吉野山へいらっしやるので、様子を知りたくて来まし

た」

「あら、今日はお休みなの？私、今から京都へ行くのだけれど」

「へー？ 僕が運転していきましようか？」

「それは、ありがたいなあ。本当にいいの？」

「はい」

「京都だから渋滞するわよ。じゃあお願いします」

何ということだろうか、これは虚子の差し金に違いない。私は有難く申し出を受けた。

高速にのつたが、京都南の出口は車が混んで、京都東の出口から降りることにした。助手席で気楽に景色を眺めて、こんな結構なことはない。山科の街を抜けると南禅寺に近づいた。岡崎の美術館、動物園、平安神宮への道は溢れんばかりの車、車、車だった。一面、桜、桜、桜、人、人、人である。

「今日は何といい日なのかしら。お花見は最高だね」

「先生、その左に観世会館と書いてありますよ」

「あら、大変。そこから入れますか」

「狭いけれど、入りましょう」

「ここだわ、丁度よかったわねえ」

少し狭いが、駐車するスペースが空けてあった。

「じゃー、塚本さん、お能はご覧にならないのなら、お昼を召し上がって平安神宮でお花見をして来て下さい」

「そうさせて頂きます」

「先生、来て下さったのですね。よかった」

案内を下さった女性が出てこられた。

十二時半であった。案内された茶屋には純也さんが先に着いていた。衣装の着付けが始まっていた茶屋は静寂に包まれていた。《鐵門》は虚子が四女の死を悲しんで書き上げた、死に向き合う話と知った。

